パパ連れてって！

家族旅行再点検

俵 萌子

BELL BOOKS

パパ連れてって！

家族旅行再点検

俵　萠子

日本交通公社

検印略

ベルブックス
パパ連れてって！
¥ 350

昭和47年2月15日　初版発行
著者　俵萠子
発行者　松田清
発行所　日本交通公社
東京都千代田区丸ノ内1－6－4
郵便番号100　編集部電話256-3481
送料　実費共70円
振替　東京 29403

印刷所　交通印刷株式会社

©俵萠子　1972　無断転載複製を禁じます
46-199
Printed in Japan　0226-6410-5847

パパ連れてって！

家族旅行再点検

俵 萌子

BELL BOOKS

日本交通公社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

検 印 略

ベルブックス
パパ連れてって！
¥ 350

昭和47年2月15日　初版発行
著者　俵萠子
発行者　松田清
発行所　日本交通公社
東京都千代田区丸ノ内1－6－4
郵便番号100　編集部電話256-3481
送料　実費共70円
振替　東京 29403

印刷所　交通印刷株式会社

©俵萠子　1972　無断転載複製を禁じます
46-199
Printed in Japan　0226-6410-5847

パパ連れてって！

家族旅行再点検

俵　萌子

BELL BOOKS
日本交通公社

序にかえて

一九七一年。私は、二人のこどもを連れて、三回旅をした。

こどもたちが生まれてからなら、もう二十数回にも及ぶであろうか。

彼らが、モノいわぬ赤ん坊であったころはべつとして、物心ついてからの旅は、ほとんど彼らにせがまれたからであった。親である私は、疲れたからだにムチ打ち、なかば義務感、なかばこどもの喜ぶ顔が見たい一心から旅をした。

だが、ここ二、三年、私の心の中で、しきりにくすぶりはじめた問いがある。こうやって、体力と時間と金をかけて旅をするが、旅とはいったい、こどもにとって何であろうか。私たち家族にとっては、何であろうか。

日本中のマイホームが、まるでモノのけに憑かれたみたいに、ゴールデン・ウィークだ、夏休みだ、秋の行楽シーズンだ、正月休みだと、狭い日本を移動するが、あれは、いったい何であろうか。

むかし、日本人は、だれ一人として、こども連れの家族旅行などしなかった。むかしの日本

人にとって、「旅は憂いもの、辛いもの」ではあっても、けっして楽しみではなかった。楽しみとしての旅が生まれたのは江戸時代からであるが、それもせいぜい庶民にとっては、都見物か、善光寺詣で、本願寺まいりといった信仰にことよせた、老人主体の旅であった。明治以降には、団体旅行、修学旅行、新婚旅行が生まれたが、家族旅行はまだ例外でしかなかった。

私たちの親の世代、祖父母の世代、いや私たち自身も、家族旅行を経験していない世代である。だが、だからといって、私たちや親や祖父母が、そのために、人間形成に異常をきたしているとは思えない。そういう説も、きいたことがない。

だとすれば、いま私たちが、なかば強迫観念に追われるようにして、家族旅行に出るのは、滑稽だという見方もできる。

「こどもが生まれてこのかた、旅にも連れていってやったことのない悪い親」

「せめて、夏休みに一度ぐらい旅につれていかなければ申し訳ない」

などと恐縮するのは、ナンセンスだという仮説もなりたつ。

私はこの本で、いま日本人の強迫観念となりつつある家族旅行の、意味を洗いたい。あるいは、とうとうその意味は、見つからないかも知れぬ。

もう一つ。意味があろうがなかろうが、すでに現実となってしまった強迫の旅を、これでいいのかと点検してみたい。体力と時間と金を、やたらに費消する旅というものに、価値を持た

せる条件を、模索してみたいと思うのだ。

昭和四十七年新春

俵　萠子

目次

体験的家族旅行Ⅰ……11
こどもたちの熱海旅行記　こどもの旅の記憶　大切な自然の認識　これで良いのか観光地

体験的家族旅行Ⅱ……39
三者三様―こどもたちの旅　大切なこどもの健康管理　車内のサービスにもの申す　こどもは見ている　金の切れ目が遊びの切れ目　かわいい子には旅をさせよ　ママがいなかった時間

わが家の旅の歴史……103
あるハプニングの教訓　ママ夏休みでありがとう　湖畔の国民宿舎で生命の洗濯　万博って困っちゃうな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

こどもにとって旅とは何か……151
家族旅行のなかった世代　忘れがたい旅の味覚
大事にしたい心のふれ合い　家族旅行は産児制限の副産物!?　千差万別の目的と発見
家庭サービスうんざりというパパ……171
タマの休みはゴロゴロしていたい　日本のパパは働きすぎ！　待たれるパパの登場　お義理のサービスはやめよう
家族旅行から夫婦旅行へ……187
夫婦旅行はまだまだ　レジャーは夫の専売特許
離婚寸前!?　男女分業社会の日本　亭主は達者で留守がよい？　港と樹木の差　太郎と花子に戻ろう　ひとり旅の必要性

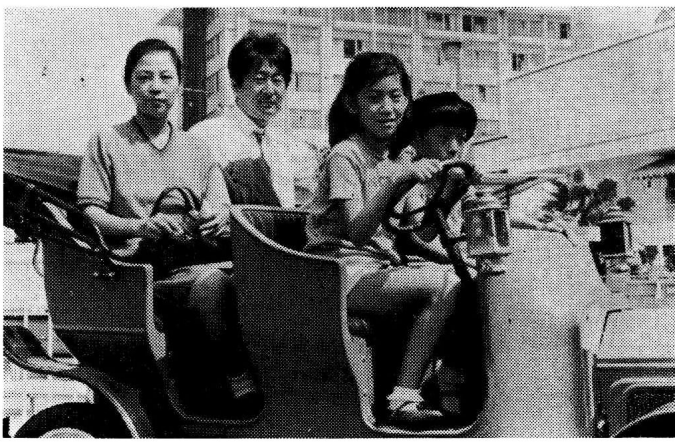
安く快適に、みのり多く

自転車と麦茶とお弁当と　〝夏休みきょうだい〟の
すすめ　緑と空間と一滴の水を！　親も子も週休
二日に

ジャケット　デザインVA
絵　俵協子／俵健太郎
西川順子

体験的家族旅行 I

熱海サボテン公園にて——1971年７月



一家揃って——1971年７月熱海Ｋホテル

こどもたちの熱海旅行記

最初に、一九七一年、わが家がおこなった三度の旅のうち、二つの旅を、分析することからはじめてみようと思う。

二つの旅のうち、一つは、同年の七月にいった、家族全員の熱海一泊旅行である。宿泊先は、こども連れに好適と宣伝されている、Kホテルだった。ホテルの敷地内に、大規模な遊園地があり、おとなには温泉、こどもには遊具、一石二鳥でたのしめる——というキャッチフレーズがついていた。

「こどもにとって、旅とは何か」を解明する一つの方法として、二人のチビに、旅の感想文を書かせてみることにした。口できいてみても、こどもの返答は、「あー、たのしかった。また行きたい」ぐらいのことに終わってしまう。感想文に関して、私は、二つの注文しか出さなかった。

「お互いに、いっさい、相談しないで書くこと。〝どこそこへいった、何を見ました〟よりはその時の気持ちを書きなさいね」

が、結果は、私の期待したようにはいかなかった。下のほうのチビ（健太郎）はまだ小学校二年生であり、上（協子）が、ようやく五年生である。上はまだしも、下はやはり、事実の羅

列にかたよりがちであった。行間から彼の気持をさぐる作業は、私がひき受けることとして、まずは、二人にとっての熱海旅行をご紹介してみよう。

念のためにおことわりしておくが、これは作文コンクールではなく、あくまでも私の研究材料であるから、彼らの作文には、ほとんど手を加えなかった。あまりにくどく、あまりに不必要な部分を、紙数の関係で省き、あとは、意味が通じない部分だけ、テニヲハを直した。

熱海旅行の感想

俵　協子

中央線の電車の中で、〝熱海〟ってどんなんだろう。きれいかな。にぎやかかな。ああ、早くつかないかな、と思っている間に東京駅についた。うれしくなって、かいだんを一だんおきにピョンピョン登っていった。

「見えた」

「こだま号」が見えた。うれしくてうれしくて、たまらなかった。

長いホームをかけって、わたしたちが乗る〝十四号車〟についた。

こだま号に乗りこんだ。荷物を置いて、いすにすわった。その時の気持ちといったら、まるでわたしがおひめさまのようだった。

〝カタン、カタンカタン〞こだま号が動きだした。
「ああ、もう病気になっても安心」
と、わたしはふといってしまった。
それは、弟が病気になり、一度熱海旅行がとりやめになったからだ。だから、二度目はぜったいに、病気はしないというきんちょうから、あのことばがでたのだろう。
始めの三十分は、わたしがまど側の席。あとの三十分は弟がまど側という決まりである。弟は、おちついていれなくて、なんべんもトイレにいった。わたしは、そのたびにわらいたくなった。
〝新横浜〞〝小田原〞と、その小田原にくるまでが長かったこと。いらいらしてくるほど長かった。そして、とうとう〝熱海〞についた。ドアが「すうー」とあき、始めて熱海の町を見た。
駅を歩いていると、〝初島二十分〞というかんばんがあった。
「ねえ、ここにいってみようよ」
とママが言った。
ホテルについてから、初島へ行こうと決めた。
わたしたちのタクシーのばんがまわってきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong